
作者とは関係ない人の話

シー様（借りの返せない雄）

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

作者とは関係ない人の話

【Nコード】

N5464P

【作者名】

シー様（借りの返せない雄）

【あらすじ】

不登校になっていく人の心理の一部

彼はスパルタ教育を受けてる。

なんで、自分ばかりがこんなに頑張らなくちゃいけないのだろうか。苦しい。でも、逆らえない。逆らうと叱られる。

どうしてこの計算問題が解けないのだろう。わからない。できないよ。ごめんなさい。問題解けなくてごめんなさい。だから怒らないで、怖いよ。神様は酷い。どうして僕にこんな試練を与えるの？ 神様なんて嫌い。大嫌い！

＜ある日、母が家に帰ってこなかった＞
どうして？ なんで？ 僕が問題を解けなかったから、お母さんは帰ってこないの？ 僕が出来だから帰ってこないの？ 神様！ お願ひ。お母さんを帰してください。一杯、勉強するので、お母さんを僕に返してください。僕が悪かったんだ。途中で我侭言っただけを止めたいと言ったから、神様が僕に罰を与えたんだ。どんな罰でも受けるから、お母さんを返してください。お願ひ・・・

6歳の少年は自宅の一室で泣いていた。時計の長針は動き、1時間が経過する。彼がクレヨンを取り出し文字と絵を書き始める。

（以下、文字）

「一人になった僕は、これからどうやって生きていけば良いのでしょうか？」

彼は涙を流しながら母の絵を描き始める。
書き終わった後も、ただただ、泣いていた・・・

そのとき、玄関が開いた。

母が帰ってきた。

彼はすがりつくように抱きついた。

その後、彼は母のスパルタ教育を受けた。

泣きながらも受け続けた。

ある日、耐えかねてボイコットしたら、1度だけブタレタ。

その甲斐もあつて彼は勉強を続けた。

彼は4年生になったとき、虐めに合う。泣いている。

（なんで俺が苛められなきゃなんのだ。誰よりも一杯努力して、頑張ってるんだ。成績が俺より遥かに下の奴にあって、こんな辱めを受けなければならぬのだ。ふざけるな。あーもう嫌だ。オレの容姿が不細工だからか？ そんなことない。じゃあなんだ？ 分からない。でも、皆オレの事助けてくれない。いらないうつてことか？ 必要とされてないってことか？ ふざけんな！ オレは誰よりも出来る男なんだ。必要とされない筈なんてない。でも、いじめられる。苛められるのは弱い人間の証。オレは皆から弱い人間だと認定されてしまったのか・・・くやましい。誰もオレの頑張りを理解してない。寂しい。一人ぼっちだ。こんな目に合うのも全部、コイツの責任だ！

彼は感情的になり、つい相手に暴力を振るってしまふ。

（しまった。あんな鼻血出てる。怖い。暴力はいけない。怒られる。先生にきつと叱られる怖い。

彼は先生に事情を説明して、理解された。以前から先生も彼が苛めに合ってるのは知っていたから、理解を示した。けれど、彼は屈辱だった。

彼（皆の前で涙を見せてしまった。男として恥ずかしい。男らしくない。しかも、暴力的な自分が広まってしまった。女子とかに絶対に嫌われた。好きなあの子にも嫌われた筈。恥ずかしい。きつと皆オレの事きらいになる。もうヤダ。消えたい。学校なんて来たくない。

苛めは終わらなかった。

彼は、目には目を歯には歯をとという考えで、暴力を使わないで対抗しようとする。

苛められる都度、先生に報告した。

（糞が！ 情けなさ過ぎる。自分で自分を弱者だと自覚するのが、これほどまでに屈辱的だとは・・・本当なら、アイツラを殺してやりたい。

でも、苛めは無くならなかった。

彼は発想を変えた。いじめる人とは同じ班だから、掃除は一緒だった。

（そうだ！ アイツら掃除サボるし、他の人も苛めてるし、オレに
関係ない事も先生に告げ口しよう。

だが、苛めは終わらない。

彼は、苛められる度に涙した。

自分の方が苛める人たちより偉いと思い込みプライドが高いせいで、
苛めの事実がどうしても受け入れがたかったからだ。

彼は泣きまくなった。その都度、「泣き虫」として自分を情けない
存在として皆に思われるのが受けられなくて、涙が止まらなかった。

そんなある日、苛めは突然、終わった。

5年になりクラス替えができたのだ。

彼は、このクラスで大きな過ちを犯した。

いじめる者、素行の悪い者を先生に告げ口をして片っ端から人の恨
みを買って行った。

彼は4年生の頃、虐めを受けて苦しい思いをしていたが、それに耐
え続けられたのは、告げ口という行為で先生に叱られる者を見て、
優越感を得て精神のバランス保っていたからだ。

まさか、それが苛める人の恨みを買い、仕返しされてるなんて、夢
にも思わないで、告げ口と苛められるのループを繰り返していたの
だ。

その告げ口する快樂の延長で、彼は、自分よりも背の小さな同級生
にボコボコにされた。

クラスメイト全員がそれを目撃していた。

全員が彼の肩を持って優しくしてくれた。

だけど、彼はくやしかった。

自分より体格の小さな者に成すすべなく負けてしまったからだ。

男として悔しい気持ちで一杯の彼は、涙を流さずには居られない。

その涙は皆に見られ。そして皆に男らしくなく負けた自分を見せ付けられたので、自分が底辺の人間だと思わざる負えなかった。受け入れたくない事実を受け入れなければならぬ境地に立たされた時

<彼は時が経つと共に自信を失っていく>

全ての人間に失望されると感じている彼は、その失望を期待に変えて自分の存在を認めさせたかった。

だが、その事に拘るあまり、彼の身体能力と頭の回転速度は、低下していく。

生きる事に対して不要な目的を得てしまったからの脳は、意識がそこ集中した。

何をしても、今までと同じ能力は発揮されなくなった。

人前で何かをする事。スポーツでのチーム関連は、全て足を引っ張る羽目になる。

その事が更に彼のプライドを傷つけ、頑張っても上手く出来ない自分に更に自信を失っていく。

彼は、それでも、逃げ道として勉強を続けた。

負けないものに没頭する事で、なんとか優越感を得て自己の自信を保とうとした。

けれど幾ら勉強したところ、周囲の人間は彼を認めない。そもそも周囲の人間は彼に何も期待していない。

彼は、この時、もう一つの逃げ道として、遊びを選んだ。

金の掛かるカードゲームという遊びで、誰かに勝つ優越感に浸っていった。

彼は熱中した。誰よりもそこに生きがいを求めていた。依存というレベルまで・・・

皆に認めさせる努力で何も得られなかった快樂より、遊んで得られる快樂を優先するかれは、人生全てを飲み込まれた。

学校での誰にも認めてもらえない居心地の悪さを我慢し、その分、遊びで発散した。

その結果、彼は周囲から「根暗な人」と評価されていく。

彼は「根暗な人」として周囲から見られているのを酷く気にした。

プライドの高い彼は、見下されていると感じた。それが受け入れられず、明るく振舞おうとした。しかし、止まった。

プライドの高い彼は、自ら彼らに歩み寄る事が出来なかった。

自分の方が偉いと思う精神は全く変わっていたなかつた彼は、この根暗を受け入れる事にした。

だがそれと同時に彼は作り笑顔して愛想が振舞えない自分に悔しい思いで居た。

彼は、失敗の連続の間に自己の自信を限りなく無くしていたので、皆に話しかける勇氣は無かつた。

でも、男らしくして頑張る事をしないといけないと思つた彼もいて、2つの相反感覚で葛藤を起こした。

彼は学校に居る時間全てを葛藤に費やした。

周囲の人間の楽しそうな交友関係を見させられる彼は、葛藤せざる負えない。

彼は、この葛藤に適応する為、勉強に精力を出し葛藤を忘れる事にした。そして、そのストレス発散の為にカードゲームに更にのめり込んだ。

彼は勉強の成果もあり、高校受験も成功して、結構いいところに行った。

その際、新たな環境で、今までの根暗イメージ切り替え、面白いキャラのイメージで行くことにした。

すると、彼の人気は上がった。広く人付き合いが出来る様になり自信もついた。

けれど、彼は、慣れない面白キャラを演じていた為に、直にネタが尽きた。

そうして友達は彼の元去っていった、

彼は広く付き合いをしていたが、深くは交流していなかった。

カードゲームに依存してキャラを演じるストレスを発散していた為に深い付き合いに割り当てる時間を取らなかつたからだ。

そうして、彼は、また、一人になるのだが、彼は人の期待に答えるのを止めた。

皆が自分の元を去っていく寂しさを知ってしまった彼は、もう、友達には要らないと誓った。

失うくらいなら、一人で居る事を選んだ彼は、それでも、その一人が受け入れられなかった。

クラスは何時も賑やかで、彼はどうしても羨ましく思ってしまうからだ。

そして、時間が経つほどに彼は病んでいく。

少しの勇気で話しかければ仲間に入れて貰えるかもしれない。けれど、彼のプライドはそれを許さない。時間を経る度に、「何？ 今更、友達になりたいの？」と見下されていると思われてしまつて感じていた。

時間が経つほどに、彼の相反する感情は強く対立していく。

そして彼は学校を逃げた。

時々学校を休み、家で勉強をした。

学校での葛藤の苦痛から開放されたかれは凄く幸せだった。そして味を占めた。

欠席がどんどんエスカレートし、あつという間に単位が足らなくなつた。

実から出た錆といえるが、完全に体は錆付いていた。

学校を休めないと自覚した彼は、家での楽と、学校での苦の余りに大きな落差を自覚した。

彼にとってそれは天国から地獄へ移動そのものだった。

地獄に居る間、天国を忘れる事が出来ない。

天国と地獄を比較し、より地獄を地獄として自覚した彼の苦痛は、時間を経ることにエスカレート。

まず、食欲不振と胸焼けと下痢が少しづつ彼を蝕む。

朝飯と昼飯は彼の中に入り込まない。

どんどんと体調を崩していく。

、依存症として救いだったカードゲームは、この時、両親に取り上げられた。

学校を休もうとしてカードゲームをしようとする彼の娯楽を奪ってしまった。

唯一の楽しみが無くなってしまった彼は、全てを忘れる様に勉強に打ち込むしかなくなった。

だが、成績は落ちる一方。

学園上位をキープしていた彼は、それが許せなかった。

成績が下がる事がどうして認められなかった。

彼は勉強した。苦手科目を独学で勉強した。

そして気づけなかった。

彼は独学で勉強した為に、自分の勉強の問題点に気づけずに、どんどん成績が落ちた。苦手科目に関わった時間分を他で出来なかった。

彼はパニックを起こした。

理由が分からない。勉強を沢山しているのに、問題集の答えが全く判らない。

どこがどう判らないのかさえ、判らない彼は、プライドのせいなのか、人に教えて貰わず、ひたすら努力した。

気づいた時には、皆と変わらない平均点レベルになっていた。

彼にとっては勉強は唯一の自尊心を満たせるものであった。その自尊心が崩れた時、彼のプライドは、それが受け入れられなかった。学校へ行くと更に自分が落ちこぼれであると自覚させられた。

周囲の人間は、日常を楽しみそこそこの点数を確保しているのに、自分は何もかも犠牲にしたのに何も楽しい事が無い。

彼はそれでも選択肢は一つしかなかった。

苦手科目を克服すること。

けれど、彼にとって地獄は更に地獄と化している。その地獄を味わうほどに天国がより天国で素晴らしいものに思えた彼は・・・

更に地獄と天国の幸せと不幸の落差を感じた。

スーパー天国とスーパー地獄である。

日曜日、天国が味わえるのだが、月曜日にはスーパー天国からスーパー地獄に行く勇気が必要となっていた。

そこで彼は耐え切れずゲロった。

親にヘルプした。

もう、地獄は嫌だと主張した。

問題はここで、彼にとって地獄が嫌だと主張するのは、スーパー地獄に行くくらいの勇気が必要だった。

ただ、スーパー地獄の勇気よりは楽であったという事。

彼は情けない自分を親に認めさせる苦痛を受け入れなければならぬ。
い。

物凄く、男らしくない彼は、プライドが自分を許さない。

冒頭での勘違いで親が帰らないときぐらいに泣きまくった。

余りの泣き虫レベルに彼の母はドン引き。

父もドン引き。

2人にとっては、一度も見たこと無い苦しそうな表情を彼がしている。

これは不味いと思った両親は、いじめとか、色々悩んでアレコレと動いた。

が、彼は誰からも苛められてない。

先生に相談したが、先生は「人当たりもいいですし、成績も上位ですし、苛めも無いですし問題もありません」

そうです。彼は止める理由が誰からも理解されなかった。成績が上位のままなのは、彼がテスト期間中に問題集を解こうとして絶望しただけなのである。彼はプライドが高いのでテストで成績は絶対悪いとテストを受ける前に確信していたのだ。テストを受けて上位から落ちれば、皆に更に見下され、学校がハイパー地獄になるのを恐怖した。彼は嘘でもいいから上位であるとクラスメイトに思わせたかったのだ。

彼は学校を辞めた後、人生に絶望していた。将来に希望が持てなかった。

しかし、カードゲームへの依存は可能だった。親達は並々ならぬ気を彼へ使った。

彼が流した涙は親にとって今まで見たことのない尋常でない涙である。

捨てられたと勘違いした冒頭でさえ、親が帰ってくる前に散々泣いてるのだから、親は涙を目撃した訳でもない。

小学校で苛めがあったのは知らないから、「泣き虫」である彼のトリードマークを深刻に受けとった。

親は彼に生きる希望を抱かせる本を与えた。

彼はその本に洗脳された。タイトル名は『ゼニの幸福論』

世の中は全て銭や銭やという夢も希望も無い思想本なのであるが、彼は真に受けた

その本には『学歴以外の道で生きる術』が書いてあり、学歴しか信

じてなかった彼にとって衝撃的な内容だったのである。

(後書き)

めでたし

恐らく、この主人公が勉強で躓いたポイントは国語と英語である。彼は文章の読解力が0に等しく、30文字以上で連なる文章を読解できないという体質であった。厳密には物語となる形式の文字が理解できないという感じ

それでも上位がキープできたのは、英単語や漢字の暗記と他の教科の点をMAXレベルで維持していたからである。

あと彼はノートを書き取る価値が判らなくて、先生に叱られて何時も理不尽な思いをした。テストの点が良いのに怒られるなんてフザケルなと言いたい。

追記

彼が幼少の頃、スパルタ教育を受けた際に勉強したものは、その殆どが漢字と計算問題だった。

問題そのものの文字数として情報量が少ない問いばかりに脳が慣れすぎて、長い情報量の問題に対しての脳(考え方)の切り替えがスムーズに行えなかったのかもしれない。もしかすると凝り固まった先入観が邪魔をしていたのかもしれない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5464p/>

作者とは関係ない人の話

2010年12月17日12時23分発行